

今日の日本 OR 学会

編集委員長日記

松井 知己

1. はじめに

松井は、2011年の5月より2年間、編集委員長を務めておりました。前任の牧本先生からお話をいただいた際、自分で務まるのかとても不安でしたが、少しでもお役に立てれば、と思ってお引き受けしました。本稿では、当時のメールを掘り起こして、時系列に思ひ出話を書いてみたいと思います。

2. 2011年

編集委員長としての大きな仕事は、長く事務局に勤務されてきた鳴原様の退職に伴う、編集事務の大幅改革でした。当時は機関誌の印刷は三美印刷様をお願いしており、機関誌編集の事務作業の多くは事務局の鳴原様が担当していらっしゃいました。6月末に鳴原様のご退職予定のため、編集作業を新たに国際文献印刷(現:国際文献)様をお願いすることとなりました。このあたりの議論や実際の契約などは、すべて前任の牧本先生が済ませてくださいましたので、松井は、編集事務手続きの構築に専念することができました。

5月から編集委員長として仕事を始めましたが、実際には6月号まで牧本先生がご担当くださいましたので、松井の最初の仕事は、5月下旬にあった7月号の校正作業でした。この頃は、校正作業等における原稿のやり取りは、まだ郵送が基本でしたが、徐々に電子メールのやり取りに移行を始めました。たとえば当時は、原稿掲載後に著者へのお礼状を事務局から郵送していたのですが、それを編集委員長(松井)からメールでお送りする、といった簡単な改革から始めました。当時の郵送に関する事務作業の手間は、かなりのものだったと思います。6月末に鳴原様が退職され7月から新たな編集事務体制に移行することとなりました。

7月からは、印刷は三美印刷様をお願いし、編集事務作業を国際文献印刷の長澤様にご担当いただく、とい

う体制となりました。7月の終わりに、半年に一度の企画会議を開催し、1~5月号の特集を決定しました。4月号の整数計画入門に関する特集については、柔らかいタイトルを付けたいと思っていたところ、ご担当の宮代先生からのメールに『はじめよう! 整数計画』…というのは冗談で、まあ細かいタイトルは後々考えます」とあったのを松井の独断で採用し、編集委員会でご了解いただきました。

8月には事務局が、根津から岩本町に移転しました。この月は、9月号執筆予定の先生の急病のため予定されていた本数から1本少ない5本の掲載となり、10月号の執筆を依頼した先生がご多用のため執筆をご辞退される、といった経験をしました。さらに新しい体制になって初めての査読付き論文が採択され、10月号掲載までの事務作業を見直す作業を行ったのもこの月でした。

9月は、11月号に掲載する学生論文受賞者紹介や、12月号以降に掲載する受賞論文要約を集約する作業がありましたが、編集事務の長澤様のご尽力で問題なく完了することができました。さらに、池辺先生にご協力いただき、松井が初めて担当する特集号となる翌年1月号『スポーツのOR』の執筆者探しをしました。9月後半には、企画委員会を開催しその後の特集を決定しました。

10月は、翌年3月号の特集『地域と住宅のマネジメント』の執筆者がなかなか定まらず困っておりましたが、特集担当の石井様のご尽力により、執筆者を集めることができました。また、表彰委員会からの依頼で、事例研究賞候補論文を機関誌編集委員会から推薦する必要があり、機関誌掲載論文を編集委員で手分けしてもう一度読み、議論するといった作業もありました。

11月号を例にとつて、編集作業の進行について紹介してみましょう。6月までに執筆者を決定し、6月中旬に正式執筆依頼、8月中旬に原稿メ切となります。いただいた原稿を特集担当と編集委員長で拝見し、必要に応じて改訂をお願いします。このときに参考文献の記述などの細かな改訂をお願いしておく、後の仕事がずいぶんと楽になります。これらの作業後、9月中旬に

2011~2012年度機関誌編集委員長

まつい ともみ

東京工業大学工学院経営工学系

〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1 W9-98

印刷会社に入稿、印刷会社からは9月末にゲラ刷りが送られて来ます。当時はまだゲラ刷りは印刷物が郵送されてきました。各原稿のゲラ刷りを執筆者・校正担当委員・特集担当委員・編集委員長の4人で1週間程度のうちに校正作業を行い、印刷会社に送ります。校正については印刷会社がとりまとめを行い、必要に応じて問い合わせが来るので、対応します。10月中旬に最終稿を特集担当委員・編集委員長で最終校正して入稿し、10月末に発行となります。特集担当委員と編集委員長は、一つの原稿を計4回くらい読んでいました。機関誌はさまざまな分野の執筆者の方がいらっしゃるため、いただく原稿の体裁や言葉遣い、数式の書き方もいろいろですが、これらはあえて揃えず、その分野の雰囲気を残すように努めたつもりです。

11月25日の理事会において、12月号掲載予定の「役員選挙広報」の文言の一部を急遽改訂することとなり、その場で印刷所に電話して差し替え可能か確認するという一幕がありました。松井は慌てるだけで何もできず、事務局長の滝沢様に迅速なご対応いただきましたことを、深く感謝いたします。

12月は年末のため、多くの作業が従来月より1週間程度早く進める必要がありました。またこの頃、機関誌の印刷を、長い間お願いしていた三美印刷様から、翌年2012年3月号より、国際文献印刷様に移行することを決定しました。編集事務と印刷の両方をお願いすることにより、だいぶ経費削減できる見通しとなりました。

3. 2012年

1月の最初の仕事は、前年に逝去された長谷川利治元会長の追悼文依頼という悲しいものでした。中国の学会でご一緒させていただいた際の長谷川先生の楽しそうな笑顔は、今でも昨日のこのように思い出されます。

2月は、国際文献印刷で初めてとなる3月号の印刷となりましたが、原稿の校了がぎりぎりまで遅れたため、最終校正の時間がほとんどない状態でした。幸い校正作業はPDFファイルを用いて電子メールでやり取りできたため、間に合わせることができました。

3月8日に4月号『はじめよう整数計画』ゲラができ上がってきたのですが、そのときの国際文献印刷ではLaTeXの原稿を打ち直していたため、(3月号と異なり)数式の多い4月号では見栄えが悪くなり、校正担当の委員からも「修正が必要である」というたくさんのご指摘をいただいでしまう状態でした。特集担当の宮

代先生からは「何なら直接、印刷業者の事務所に行ってもよいです」という真摯なメールもいただき、どうしたらよいか困っていたところ、3月13日には国際文献印刷様より、作成したゲラをすべて廃棄し、LaTeX原稿を元に新たにゲラを作成するとのご英断の連絡をいただきました。この号については、特集担当の宮代先生と執筆者の皆様、そして国際文献印刷様にも、通常の2倍以上の作業を短時間で完了していただき、本当に感謝しております。宮代先生の熱意が実り、この特集号はとても評判がよく、この後『はじめよう〇〇』という特集が組まれる先鞭となったと思います。

4月は少し楽な月でした。というのも、5月号は関西支部で特集を企画していただいているからです。この年は乾口先生がすべて取り仕切ってくださいました。

以降は前年とほぼ同じ作業を繰り返すだけで2012年はほぼ無事に過ぎていきました。

4. 2013年

2013年の1月号では、著者の貞広幸雄先生のお名前を誤記するという大きな失敗をしておきました。先生ご自身からは、気にしていませんよ、と優しいご連絡をいただき、本当に申し訳なく思っております。

最後の大きな事件は2月でした。いろいろな不幸が重なって、4月号『グラフと確率・統計モデル』の原稿が3本しか確保できない状態となりました。松井が1本書くこととし、2週間程度で原稿を書いてくださる方を委員の皆さんに探していただきました。生田目先生から、大阪府立大学の森田裕之先生をご推薦いただき、森田先生からは超特急で原稿をいただくことができました。この場を借りて、森田先生には深く御礼申し上げます。

編集委員長最後の仕事は、最も重要とも言われる、次期編集委員長探しです。これについては、ご多用な池上敦子先生に無理を言ってお引き受けいただきました。その後の池上編集委員長のご活躍は、皆様もよくご存じのことと思います。

5. 投稿論文のハンドリング

ここまでの記事では書いていませんが、機関誌編集の大きな仕事に、投稿論文のハンドリング(査読者担当など)があります。機関誌には、さまざまな分野の論文が投稿されるため、査読者探しはなかなか困難です。しかも査読を依頼すると、逆に査読を依頼される機会が増える、という副次的な効果までついて来る作

業です。池上先生と相談して、投稿論文のハンドリングは編集委員長の仕事と切り離すこととし、松井が編集委員をもう1年留任して担当させていただきました。1年後に、この仕事を生田目先生に引き継いでいただき、松井の編集委員の仕事は終了となりました。

6. おわりに

松井が携わっていた間の最も大きな変化は、ほとんどすべての作業が電子メールでできるようになったこ

とと思います。それ以外のことは、残念ながら積み残しばかりで、申し訳なく思っております。

最後となりますが、当時松井を支えてくださった編集委員の皆様へ深く感謝いたします。特に、アドバイザーの根本俊男先生、執筆者探しに困った際に松井が頼ってばかりだった石井儀光様と武内陽子様、査読者探しで何度もご助言いただいた生田目崇先生に、深く御礼申し上げます。